【優秀賞】愛媛 FC 賞
「富士山と私」　愛媛大学教育学部附属中学校　２年　渡部凛仁

「やったー、ついに富士山の頂上についたぞー、とても大変だったけど、なんとか登れてよかったー。」

今年の夏休み、家族で初めての富士登山に挑戦した。頂上に近づくにつれて、空気は薄くなるし、足がクタクタになって、進むのも大変だった。でも一歩ずつ前に前に足を出す積み重ねで、念願だった富士山登頂を達成することができた。

事前の準備も一生懸命だった。ネットで富士登山の情報をいろいろ調べた。その情報では、八月の登山者はかなりの大人数で、その中には外国人も多いとか。また、マナーが悪い外国人もたくさんいるということだった。私は、それがとても気になりながらも、いよいよ当日を迎えた。

富士山山頂を目指し出発。目はきょろきょろ、外国人登山者の行動が気になっていた。しかし、マスコミで大げさに報道されるほど外国人のマナーが悪いとは思えなかった。確かにそういう人もいるけど、日本人の登山者の中にも同じように悪い人は多かった。

もし、私が、実際に富士山に登っていなかったら、外国人＝マナーの悪い人になっていたかもしれない。外国人の中には、道を譲ってくれたり、私が立ち止まりそうになった時に「ファイト、ファイト」と声を掛けて励ましてくれたりした

人もいた。また、山頂では世界中の人たちが集まり、いろんな国の人たちと触れ合い、心が一つになった気がした。そして、大げさかもしれないけれど、この地球上で戦争が起きていることがうそのようにも思えた。

私は、この富士登山のことを松山に帰ってすぐに祖父母に報告した。一番伝えたかったことは、「なぜマスコミは外国人のマナーの悪さばかり伝えるのか、知らない人にはきっと外国人に対し悪い印象しか残らないだろう」と。

祖父母は、目を細めて、「いい勉強をしてきたね」と言ってくれた。そして「偏った見方が差別や偏見につながるんよ。自分の目で見て、確かめて、感じてこそ本当に相手のことが分かるんよ。」と教えてくれた。そして、この差別や偏見が重大な人権問題につながっていると話してくれた。私も確かに今まで、肌の色や目の色が違う外国人に対し、怖いとか気持ち悪いなどの感情を持ったことがあるが、今回の富士登山で外国の人と触れ合うことにより、今まで感じていた偏見が吹っ飛んでいったように思う。

外国人のマナーが悪いと言われる原因の一つに、日本のマナーをよく理解できていないことが挙げられると思う。もし、自分が将来外国で暮らすようになって、悪気はなくても外国のルールを知らなかったために、まわりから変な目で見られることになったら悲しい。そのためだろうか、登山道のあちこちに外国人にも分かりやすいような掲示物や表示があった。家に帰って調べてみると、他にも

富士山を取り巻く県では、外国人が安心して登山できるような取り組みを行っていることが分かった。その中に、外国人登山者とのコミュニケーションを円滑にするために「やさしい日本語」講座や話し方研修を開いたり、外国人が分かりやすい掲示物作戦をおこなったりするなど、外国人の持つ文化や価値観、生活習慣などの多様性を認め合いながら共生する社会づくりを目指している県もあった。富士山は日本一の山だけど、それは高さだけじゃなく、人権文化を広める日本一の素晴らしい山なんだと勝手に想像した。

私の住む松山にも道後温泉などの観光地があり、外国人観光客も多く訪れている。この地元でも外国人と共生できる優しい松山を目指し、外国の人たちが楽しく、安心して旅行したり、住んだりする方策をいろいろ考えているだろうから、これから少しずつ調べてみたい。

富士登山から帰って、テレビを見ていると広島の原爆記念日や終戦記念日のニュースが流れていた。戦争に関する番組もひんぱんに放送され、思わず涙が出そうな場面もあった。この戦争も偏った報道で国民が翻弄され、最後は悲惨な状況に追い込まれたように感じた。本当のことが報道されていれば、こんなにも戦争が長引かなかっただろうし、尊い命も失われていなかっただろう。ひょっとして、原爆も落とされなかったかもしれない。まだまだ勉強不足で分からないことがいっぱいあるが、今後このようなことが起きないために、今の自分ができるこ

とは、物事を一方的に見ないこと。どんな事柄や報道に対しても常に思い込みや偏見を持たないで、問題意識をもって自分の目や心で確かめることだと思った。

今でも目を閉じると、富士山頂からの素晴らしい景色が目に浮かぶ。そして、いろんな国の人たちと同じ景色を見ながら喜び合った瞬間を私は一生忘れない。